

明日香は中学校1年生。最近、親に携帯電話を買ってもらい、それに夢中になっていた。しかし、中学生にもかかわらず親に買ってもらったのには理由があった。周りの仲が良い友達たちが持っているのが、明日香もほしかったのである。しかし、そんな理由では買ってもらえるはずがないことは知っていた。そこで、明日香は塾に通っていて、何かの連絡用にするということを理由にした。母親からは何度もダメだと言われた明日香であったが、父親も巻き込んでの騒動となり、結果的には、その理由の通りに使うということで、買ってもらったのである。

以前は親の携帯電話を借りて、色々使っていたが、メールを友達とやり取りする時、どんな内容の話をしているのかを親に知られてしまうので、誰が見てもいいような簡単な話や遊ぶ約束などをするぐらいであった。しかし、自分専用の携帯電話を持つようになってからというもの、親にメールを見られる心配もなく、自由に友達とメールのやり取りをできることに喜びを覚え、親に内緒で毎晩、何通もメールを打ったり、もらったりしていた。それはまるで、小さな鳥カゴに入れられていた小鳥が、鳥カゴから飛び出し、自由に大空を飛び回るといような喜びにも似た気持ちであった。

多い日には1日で10通以上もメールをするようになり、明日香にとっては、携帯電話のメールは、絶対に無くてはならない生活の一部になっていた。いつも、友達からメールが来ていないかどうか気になりすぎて、不安になるほどであった。また、明日香は、携帯メールを使い始めてからというもの、いつの間にか、普段、学校では口にすることがないようなひどい言葉づかいをするようになっていた。

<受信メール> 件名：聞いてよ！

田中のやつ、超ムカつくんだけど・宿題ぐらい見せてくれたっていいのに、明日香、どう思う？

<送信メール> 件名：Re: 聞いてよ！

まじ、ウザ(-.-;)あんな奴相手にしないほうがいいよ(・\_・)9

そうした言葉遣いの悪さに、少し気が付いてはいたが、大したことではないと思っていた。

塾がない金曜日の夜のこと、明日香は自分の勉強部屋にいた。右手に握ったシャーペンの動きは止まり、携帯電話のボタンを押す左手の親指だけが素早く動いていた。明日はテニス部の大会があるから、部活の話でもしようとして何人かの部活の友達にメールを送っていた。明日香は「送信」のボタンを押して、机の上の目の届くところに携帯電話を置いた。

コツコツとシャーペンの先が筆箱をつつく音が明日香の部屋に響く中、メールの着信を告げる着メロの音が鳴った。それは、同じ部活に入っている和美からであった。

<受信メール> 件名：マジヤバ

明日香・瞳になんかやばいメール送った？ 瞳から、マジ切れメールだよ。

<送信メール> 件名：Re: マジヤバ

えっ( 0 ;)何のこと？和美，教えてよ！

<受信メール> 件名：Re:Re: マジヤバ

瞳のこと悪く言ったでしょ。部活のとき、ボール拾いしないから最悪だって・・・



たしかに、次のように瞳にはメールを送った。

<送信メール> 件名：練習の時のこと

「瞳さ、マジ、最悪e(^.^)なんだよ。ボール拾いは絶対しなきゃいけないんだって(・3・)」

自分は、瞳に自分の不満を聞いてもらいたかっただけなのに、和美によると、瞳が明日香に悪口を言われたと怒っているというのだ。なぜなのか分からない。瞳とは小学校のテニスクラブからのつきあいで、いつもテニス部での出来事をメールでやり取りすることも多く、気心も知れているはずなのに、「なぜ？」という言葉は何度も心の中で繰り返した。練習の時に、先輩から絶対にボール拾いをするように言われて、うんざりきいていて、そのことを瞳にも分かってもらいたかっただけなのだ。少し考えてから、返事を和美に送った。

<送信メール> 件名：Re:Re:Re:マジヤバ  
これやばいかな・・・「瞳さ、マジ、最悪 e(∧.∧)ボール拾いは絶対しなきゃいけないんだって(・3・)」って送ったんだけどさ。ただ、先輩からボール拾いを絶対するように言われたって愚痴を瞳に聞いてもらいたくて(T\_T)

<受信メール> 件名：Re:Re:Re:Re:マジヤバ  
そうだったの・・・愚痴ね、そう言われたらそうだね。分かる、分かるでも、瞳がマジで最悪って感じにも読めるし、まるで瞳がボール拾いをしないとイケないよって注意されているような感じもするよ。

<送信メール> 件名：Re:Re:Re:Re:Re:マジヤバ  
そうか・・・(;>\_<;)

明日香は和美にそうメールを送り終わるとすぐに自分が送ったメールを読み直した。

<送信メール> 件名：練習の時のこと  
「瞳さ、マジ、最悪 e(∧.∧)なんだよ。ボール拾いは絶対しなきゃいけないんだって(・3・)」

「もし、私がこのメールを逆に受け取っていたら・・・」  
たしかにそんなつもりじゃなかったのに、和美が言ったように、瞳に悪く言っているようにも受け取れる。明日香は、携帯電話を手に取り、メールのボタンを押して、あわてて瞳に送るメールを打ち始めた。いつもなら軽快にメールを打つ明日香だが、なぜか携帯電話のボタンが重たく感じられた。

<送信メール> 件名：誤解だよ！  
瞳、ごめん。あれは、瞳が最低という意味じゃなくて、「サイアク」いつも口癖みたいになって・・・それで・・・私の気分が最悪だって・・・それで先輩からボール拾いをしろって言われて・・・「しなきゃいけないんだ」って言われて・・・

だんだん何を打っているのか、どうメールを打てば伝わるのかが分からなくなり、ボタンを押す指を止めた。

「私・・・ただメールで・・・メールで・・・何してるんだろう・・・」  
そして、机の上にかざっている、小学校のころ、瞳と一緒に撮った写真に目をやり、じっと見つめた。そして、明日香は、携帯電話を手に握りしめたまま、何かを思い立ったように「よし、そうしよう。」と声を出して、少しばかりの微笑みを取り戻したのだった。

それから、明日香は  た。

翌日、テニス大会の会場では、明日香と瞳は二人並んで、声をそろえて精一杯の声援をチームに送っていた。